谷間で憩う橋

28 吾嬬橋

あづまばし

日本人は三という数字が好きだ。日本三大河川といえば、坂東太郎（利根川）に筑紫次郎（筑後川）、それに四国三郎（吉野川）と昔から相場がきまっている。日本の河の長男である利根川は、渋川あたりから関東平野に流れ入り、それまでの急流の面影を残しながらも次第に穏やかな流れに表情を変えていく。

人々は渋川付近で利根川を渡るため、明治12年（1879）に舟橋を造った。さらに明治23年には馬車鉄道を通すために、木橋を架けた。しかし木の橋では洪水にはひとたまりもなく、架けては流され、直しては流された。

そこで明治34年（1901）に、15万５千円をかけて、アメリカから輸入した鋼材で、ピン結合のトラス橋３連を連ねる坂東橋を架けた。道路橋で鉄の橋といえば、東京でもまだわずかしかなかった頃のことである。しかもこの頃の支間長67.3ｍを超える道路橋は、隅田川の永代橋だけだった。当時のこの地としては、大変立派な橋が出現したのである。

この橋は洪水にもよく耐え、人々を渡してきた。人や車ばかりではなく、電車も通していた。戦争中は木炭自動車が落とした炭火で、板張りの橋床が燃えだす騒ぎも何回かあった。こうして戦中・戦後を働き続けたこの橋も、昭和26年に行なわれた検査で、橋体が二割も三割も弱くなっていることがわかった。

渋川で働き続けること60年、よる年波に勝てなくなった坂東橋は、新しい橋に後を任せて、昭和36年（1961）、群馬県北西部の六合（くに）村に１連、その他の地に１連ずつとばらばらに分かれて引退した。

六合村の１連は補修を加えてもらって吾嬬橋となり、県道を通していたが、曲がりくねった道を谷底まで降りてこの橋を渡り、再び上がっていくことはいかにも不便だった。昭和52年に新しい吾嬬橋が谷のはるか上方に完成し、県道はそちらに移った。

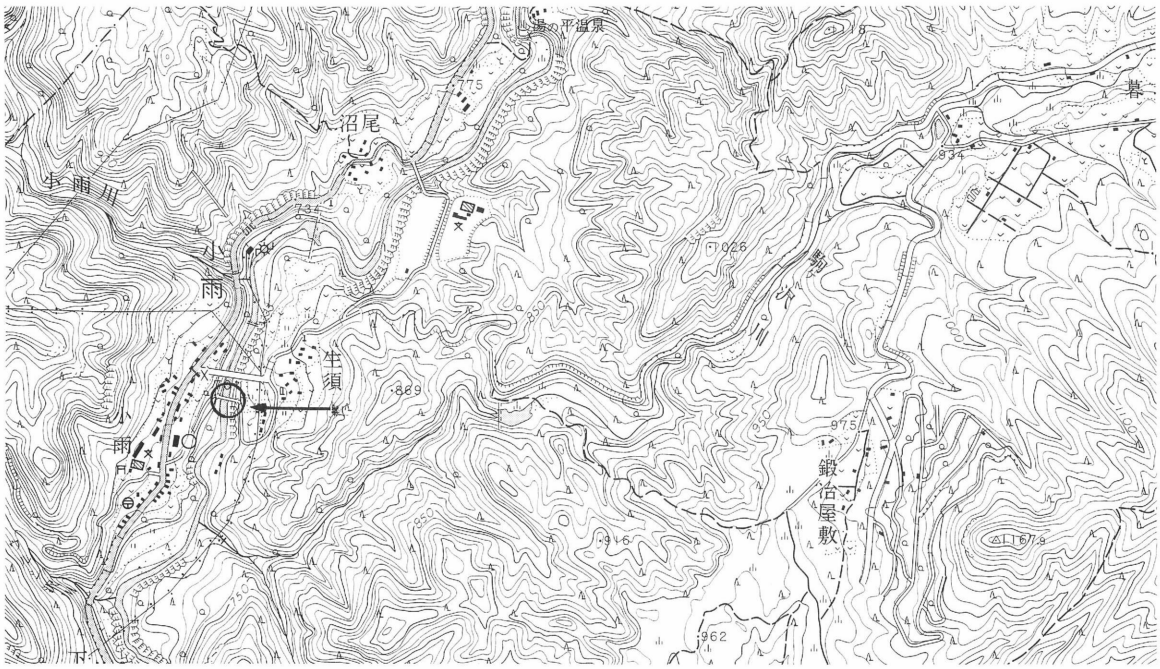
六合村へ行くには、渋川から吾妻川沿いに国道を走り、長野原で右折、県道を北上する。吾妻渓谷からこの山道一帯は、秋になると紅葉の眺めが素晴らしいところだ。やがて視界が一挙に開けて、猪谷千春を育てた六合村が見えてくる。一度右岸に渡り、さらに走って、渓谷沿いに細長く伸びる集落をほぼ過ぎようとするころで、県道を右に折れ大きな方杖ラーメン橋を渡って、左岸に達する道がある。この橋の上から深い谷底を見下すと、古色蒼然とした吾嬬橋がポツンと架かっているのが見える。この辺は昔の山村の面影をなおとどめていて、資料館もあり、散策にも好適である。

旧吾嬬橋は、坂東橋として生れてから数えてほぼ１世紀、坂東橋時代に一緒だった２連の兄弟橋もすでになくなってしまい、今は白砂川の深い雑木林に囲まれて、ひとり静かな余生を過ごしている。ときに橋を訪れる媼（おうな）と昔話をし、蝉をとる子供達の声を聞きながら。

〔ＦＩ〕

竣工年月：昭和36年
所在地：群馬県六合（くに）村
河川名：白砂川
橋長・幅員：69.1ｍ×４ｍ
径間数・支間長：１×67.3ｍ
形　式：下路ペンシルベニアトラス

〈1993年1月，撮影・中川浩一〉



(1:25,000　小雨)